共立女子大学家政学部紀要　第67号（2021）

小学校への移行期の子どもを持つ母親の適応に関する研究
―幼稚園・保育所による比較―

A Comparative Study between Mothers of Kindergarten Children and Nursery School Children: The Mothers' Adaptation during Their Children's School Transition.

西坂小百合[1]、綾野鈴子[2]、村上康子[1]、権藤桂子[1]
Sayuri NISHIZAKA, Suzuko AYANO, Yasuko MURAKAMI, Keiko GONDO

1．問題と目的

幼稚園・保育所等から小学校への移行期における児童の適応は、幼小接続や幼小連携などの言葉で代表される重要な検討課題である。これは日本に限らず多くの国々で検討されており、OECD（2017）がTransitionについてまとめた報告書においても、様々な国の実態や取り組みが紹介され、児童の適応を支えるプログラム開発や、幼児教育・小学校教育におけるカリキュラムへの働きかけなどがまとめられている。我が国においても、これまでは、児童や幼保小のカリキュラムに働きかけることが中心であった（例えば、アプローチ･カリキュラム、スタート･カリキュラムなど（文部科学省、2015））。しかしながら、移行期の児童の適応を左右する背景要因の一つである、親のコンピテンスや親の意識変化などといった「親」についての研究は、我が国においては十分な知見が得られているとはいえない。OECD（2017）の報告においても、小学校への移行における親の役割の重要性が示されている。円滑な移行にとって親子関係の質が影響を及ぼすこと、親自身が子どもの困難などの特徴を理解するのに移行期が重要な時期であることがまとめられている。そのうえで、保護者が子どもの移行を支えるためのツール（情報提供、認識を高める活動など）が開発されている国もあるが、これらもやはり子どもの移行が中心であり、親自身の移行期における適応の課題については未だ検討が十分ではないことがわかる。

我が国においては移行期の子どもをもつ親の期待や不安などの意識について、探索的な研究がいくつかある（例えば椋田、2013；富山、2014；2015など）。椋田（2013）は、就学前後の２回にわたる母親を対象とした面接調査から期待と不安の内容を明らかにするなかで、子どもの友達関係や学校生活への適応だけでなく、親同士の関係や教師との関係などについての保護者の期待や不安があることを示し、第１子よりも第２子以降で不安が軽減される可能性を示している。富山（2014；2015）も、小学校１年生の親を対象とした調査において親の持つ期待や不安には、子どもの適応と親の適応、学校との関係に関するものがあることを示している。綾野・西坂・村上・権藤（2019a）は、これらの研究で扱われている期待や不安は友達関係や学校生活など「子ども」を取り巻く内容であり、母親と教師との関係や、他の親との関係など、親自身の抱く期待や不安については十分な言及はされていないことを指摘している。そして、Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B.（2011）による「個人のレベル」「関係のレベル」「環境のレベル」の３つのレベルの理論モデルによって期待や不安などの意識を構造的に捉える必要性を指摘している。「個人のレベル」は、親自身が小学生の親としての自分をどのように感じているか、子どもの様子に関して

[1] 共立女子大学　[2] 小田原短期大学

親が得られる情報の程度なども含まれる。また「関係性のレベル」とは、教師や学校との関係、子どもと親との関係、「環境のレベル」には、親自身の学校生活への関与が含まれる。綾野ら（2019a；2019b）は、小学生を持つ母親を対象とした探索的な面接調査から、母親自身が情報を得ることによって不安が軽減されること、親子関係、母親同士の関係や教師との関係の構築の質が子どもの安定的な移行へ影響を及ぼす可能性があることを示している。Nishizaka, Gondo, Murakami, & Ayano（2017）は３つのレベルをもとに構成した期待や不安などの親の意識を尋ねる調査項目を用いて、幼稚園から小学校への移行期の子どもをもつ母親を対象に行った調査において、親の意識が「子どもの様子がわからなくなる不安」「小学生の親になる自信」「子離れの受け入れ」の３つの因子によって構成されることを確認している。小学校での「子どもの様子がわからなくなることへの不安」は第１子を持つ母親のほうが高く、一方で「子離れの受け入れ」のような自由な時間の増加など新しい生活への期待感は、第２子以降の母親のほうが高いことが示されている。また、柏木（1995）による親となることによる成長・発達尺度との関連において、「小学生の親になる自信」との関係が示されており、親としてのコンピテンスの高さが小学生の親になる自信に影響する可能性を示している。この調査は幼稚園の保護者を対象として行われているが、幼稚園と保育所では親の移行期の適応に異なる様相が示されると予想される。保育所では多くの場合は両親ともに働いていることから、子どもが小学校に就学することによる生活の変化がある一方で自分の職業生活は維持するという異なる特徴が適応に影響を及ぼすと考えられる。そこで、本研究においては、小学校への移行期の親の期待や不安などの意識を幼稚園と保育所によって比較することから、その特徴の違いを描き出し、幼稚園・保育所それぞれにおける支援や、小学校での支援に貢献する資料を提供することを目的とする。

２．方法

（１）対象者と手続き

東京都とその近郊の地域の５つの幼稚園と４つの保育所に依頼し、調査用紙を配布・回収してもらった。実施時期は幼稚園が2017年２月及び2018年２月、保育所は2019年２月であり、配布数は幼稚園523部、保育所119部、回収数は幼稚園262部（回収率50.1％）、保育所90部（回収率75.6％）である。対象者の子どもの性別、出生順位の内訳はTable １に示すとおりである。また、対象者（全員母親）の年齢は、20代が13人（3.7％）、30代が182人（51.7％）、40代が150人（42.6％）、50代以上が３人（0.9％）、無回答が４人（1.1％）であった。就労状況については、幼稚園の母親において無職が192人（73.8％）、パートタイムが52人（20.0％）、フルタイムが３人（1.2％）、その他が13人（2.0％）、保育所においてフルタイムが56人（62.2％）、パートタイムが30人（33.3％）、育休その他が３人（4.5％）であった。

Table １　対象者の子どもの性別と出生順位（N=352）

	子どもの性別	第１子	第２子以降	合計
保育所	男児	24（55.8％）	19（44.2％）	43（100.0％）
	女児	32（68.1％）	15（31.9％）	47（100.0％）
幼稚園	男児	72（55.8％）	57（44.2％）	129（100.0％）
	女児	60（45.1％）	73（54.9％）	133（100.0％）
合計		188（53.4％）	164（46.6％）	352（100.0％）

（2）調査内容

①就学前の親の意識

Nishizakaら（2017）で用いられた就学前の親の意識の尺度を用いた。Wildgruberら（2011）による小学校への移行期における親の発達課題を捉える「個人」「関係」「環境」の３つのレベルに基づいて６つずつ計18項目で構成され、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」の５件法で尋ねた。

②親性

柏木（1995）による親となることによる成長・発達尺度を用いて、親としての一般的なコンピテンスを尋ねた。

③フェイスシート

回答者の年齢、職業の有無、子どもの性別、出生順位などを尋ねた。

（3）倫理的配慮

まず、幼稚園・保育所に対して調査の趣旨や目的を説明し、調査への協力を求めた。調査協力者に対しては、調査の趣旨や目的、調査が無記名で行われ個人が特定されないこと、データの取り扱いなどについて書面にて説明したうえで、調査書の提出をもって調査への協力を同意したものとする旨記載した。なお、本研究は、共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。

3．結果と考察

（1）就学前の親の意識項目の分析

就学前の親の意識に関する18項目について、平均値と標準偏差から分散に偏りのある３項目を除く15項目に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。分析の際には想定された３因子に設定した。その結果、固有値1.00以上の因子が３抽出され（固有値：2.16, 1.83, 1.19）、累積寄与率は39.94％であった。回転後の因子パターンと因子間相関をTable 2に示

Table 2　就学前の親の意識項目の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	M（SD）
Ⅰ 自分自身の生活の変化への期待				
16 子どもが小学校に入学したら自分も新しいことをしようと思う	.999	-.025	.003	3.32（1.23）
13 子どもがいない時間の使い方が変わると思う	.540	.027	.063	3.38（1.28）
Ⅱ 子どもの様子がわからなくなる不安				
2 子どもが学校でどのように過ごしているのか、わからないのではないか心配である	.077	.744	-.007	2.37（1.05）
12 先生に気軽に相談したりできるか不安である	-.026	.577	.180	2.72（1.10）
17 放課後など子どもが一人で行動する範囲が広がるので心配である	-.170	.480	.016	2.05（0.98）
3 子どもの学校での成績が気になる	.136	.428	-.247	2.21（0.89）
Ⅲ 小学生の親になる自信				
7 親自身、他の保護者とうまくやっていけると思う	-.075	.047	.536	3.35（0.80）
8 授業や行事など、親の手伝いが必要であればできると思う	.090	-.015	.514	3.53（0.90）
18 学校の準備や宿題を見るなど、子どもを手伝うことができると思う	.161	-.051	.452	3.92（0.81）

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	-	.079	.336
Ⅱ		-	.124
Ⅲ			-

す。第１因子は「16子どもが小学校に入学したら自分も新しいことをしようと思う」「13子どものいない時間の使い方が変わると思う」など、小学校入学に伴う時間の使い方や生活の変化に対する期待を表す項目であることから「自分自身の生活の変化への期待」と命名した。第２因子は「２子どもが学校でどのように過ごしているのか、わからないのではないか心配である」「12先生に気軽に相談したりできるか不安である」など、子どもの様子を知ることが難しくなることに対する不安であることから「子どもの様子がわからなくなる不安」と命名した。第３因子は、「７親自身、他の保護者とうまくやっていけると思う」「18学校の準備や宿題を見るなど、子どもを手伝うことができると思う」など、小学生の親としての自信を表していることから、「小学生の親になる自信」と命名した。

（２）親となることによる成長･発達尺度の分析

親となることによる成長・発達尺度27項目について、平均値と標準偏差から分散に偏りのある３項目を除く24項目に対して因子分析（最尤法、エカマックス回転）を行った。分析の際には想定された６因子に設定した。その結果、固有値1.00以上の因子が３抽出され（固有値:5.64, 2.19, 1.80, 1.76, 1.16, 1.05）、累積寄与率は56.15％であった。回転後の因子行列をTable 3に示す。第１因子は「11日本や世界の将来について関心が増した」など日本社会の課題に対する関心に関する項目であることから「Ⅰ社会への関心」と命名した。第２因子は「９人との和を大事にするようになった」「他人に迷惑にならないように心がけるようになった」など周囲の他者との協調や共感を表す項目であることから「Ⅱ協調と共感」と命名した。第３因子は「２考え方が柔軟になった」「１角が取れて丸くなった」などの項目で構成されることから「Ⅲ柔軟さ」と命名した。第４因子は「17運や巡り合わせを考えるようになった」「16物事を運命だと受け入れるようになった」など運命や信仰を受け入れる内容であることから「Ⅳ運命・信仰の受容」と命名した。第５因子は「４精神的にタフになった」「５度胸がついた」という精神的な強さをあらわる項目であることから「Ⅴ精神的な強さ」と命名した。第６因子は「23自分がなくてはならない存在だと思うようになった」「21生きている張りが増した」など、自分の存在意義や生きがいに関する項目であることから「Ⅵ生きがい・存在感」と命名した。これらは柏木（1995）によって示された６因子である「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命･信仰･伝統の受容」「生きがい･存在感」「自己の強さ」と全く同じではないが、内容的に類似する結果となった。

（３）子どもの出生順位及び幼保の違いによる就学前の親の意識の分析

幼保、出生順位による就学前の親の意識の下位尺度得点をTable 4に示す。幼保、出生順位による意識の違いを検討するために、就学前の親の意識の下位尺度得点を従属変数とした幼保（２）×出生順位（２）の分散分析を行った。

「Ⅰ 自分自身の生活の変化への期待」については、幼保と出生順位の交互作用が有意であった（F（1,348）=4.42, p<.05, η_p^2=.01）。単純主効果の検定を行ったところ、第１子における幼保の主効果（F（1,348）=25.39, p<.01, η_p^2=.07）、第２子以降における幼保の主効果（F（1,348）=47.64, p<.01, η_p^2=.14）、幼稚園における出生順位の主効果（F（1,348）=11.01, p<.01, η_p^2=.03）が有意であった。Figure 1に示されるように、幼稚園の母親のほうが保育所の母親よりも自分自身の生活の変化への期待が高く、中でも第２子以降においてその傾向は顕著であるといえる。幼稚園の母親は、送迎がなくなり自由にできる時間が増えると考えられ、その時間の使い方への期待が高まっているといえる。特に第２子以降は第１子での既有経験がその期待を高めており、さらにそれが末子であればより期待が高まると予想される。第１子は予想がつかない

Table 3　親となることによる成長・発達尺度項目の因子分析結果（最尤法・エカマックス回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	M(SD)
Ⅰ 社会への関心							
11 日本や世界の将来について関心が増した	.850	.120	.125	.103	.085	.139	2.85(0.75)
12 環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した	.704	.172	.017	.119	.148	.145	2.97(0.76)
15 日本の政治に関心が増した	.653	.106	.072	.149	.119	.189	2.68(0.76)
13 児童福祉や教育問題に関心を持つようになった	.606	.140	.086	.022	.158	.178	3.14(0.71)
Ⅱ 協調と共感							
9 人との和を大事にするようになった	.102	.807	.127	.080	.041	.100	3.14(0.67)
6 他人の迷惑にならないように心がけるようになった	.121	.657	-.022	.065	.057	.017	3.25(0.67)
8 他人の立場や気持ちを汲み取るようになった	.127	.603	.223	.147	.097	.157	3.05(0.59)
10 自分本位の考えや行動をしなくなった	.187	.559	.027	.042	.149	.184	2.90(0.64)
18 長幼の序は大切だと思うようになった	.127	.424	.006	.324	.105	.149	2.70(0.70)
Ⅲ 柔軟さ							
2 考え方が柔軟になった	.118	.009	.789	.025	.230	.249	2.67(0.71)
1 角が取れて丸くなった	.006	-.001	.733	.020	.150	.147	2.39(0.71)
3 他人に対して寛大になった	.079	.151	.731	.070	.153	.057	2.72(0.68)
Ⅳ 運命・信仰の受容							
17 運や巡りあわせを考えるようになった	.048	.123	.079	.824	.087	.097	2.78(0.80)
16 物事を運命だと受け入れるようになった	.070	.102	.048	.811	.160	.062	2.61(0.80)
20 人間の力を超えたものがあることを信じるようになった	.119	-.002	.004	.490	.107	.261	2.39(0.89)
Ⅴ 精神的な強さ							
4 精神的にタフになった	.086	.014	.220	.084	.962	.102	2.84(0.77)
5 度胸がついた	.129	.111	.169	.158	.529	.134	2.78(0.75)
Ⅵ 生きがい・存在感							
23 自分がなくてはならない存在だと思うようになった	.169	.124	.155	.148	.120	.695	3.07(0.79)
21 生きている張りが増した	.086	-.018	.195	.181	.248	.593	3.14(0.80)
25 自分の健康に気を付けるようになった	.188	.186	.126	.080	.068	.520	3.18(0.75)

Table 4 幼保，出生順位による就学前の親の意識の各下位尺度得点（括弧内は標準偏差）

	幼稚園		保育所	
	第１子 (N=132)	第２子以降 (N=130)	第１子 (N=56)	第２子以降 (N=34)
Ⅰ 自分自身の生活の変化への期待	3.42（1.05）	3.83（0.96）	2.62（1.00）	2.50（0.96）
Ⅱ 子どもの様子がわからなくなる不安	2.13（0.63）	2.62（0.64）	2.07（0.66）	2.54（0.74）
Ⅲ 小学生の親になる自信	3.67（0.61）	3.70（0.53）	3.31（0.64）	3.43（0.55）

ことや、その下に第２子以降がいることによって、第２子以降のグループよりも期待が下がっていると予想される。一方保育所の母親については、保育所への送迎がなくなるとはいえ、就労のために自由な時間が増えるとはいえないことから、このような結果になったと考えられる。

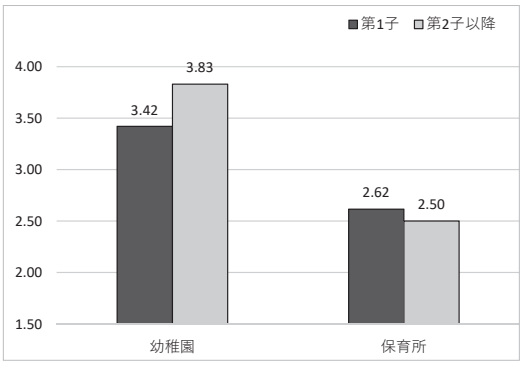

Figure 1　幼保別・出生順位別「自分自身の生活の変化への期待」得点

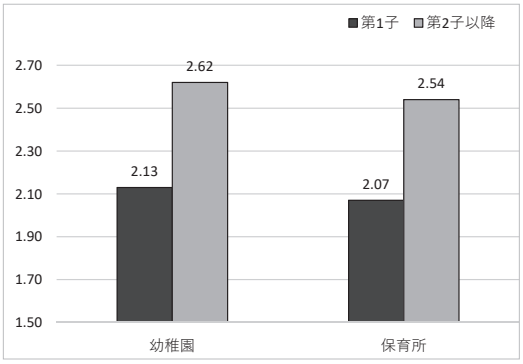

Figure 2　幼保別・出生順位別「子どもの様子がわからなくなる不安」得点

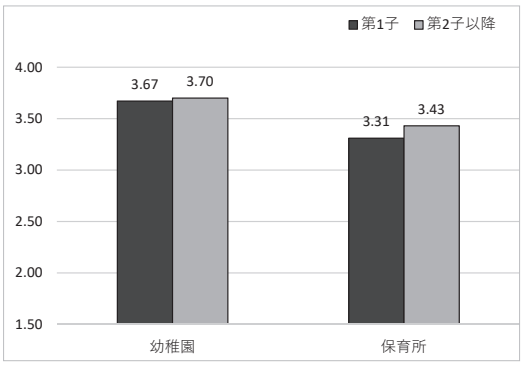

Figure 3　幼保別・出生順位別「小学生の親になる自信」得点

「Ⅱ 子どもの様子がわからなくなる不安」においては、出生順位の主効果が有意であった（$F(1,348)=34.98$, $p<.01$, $\eta_p^2=.08$）。Figure 2に示されるように、幼稚園・保育所の違いに関わらず第２子以降よりも第１子のほうが不安が高いことが示された（不安項目は逆転項目）。第２子以降であればすでに年長のきょうだいが小学生として過ごした経験があるために、学校での様子が把握しづらくなることを具体的に知っているが、第１子の母親は様子がわからなくなることに漠然とした不安を感じると考えられる。

「Ⅲ 小学生の親になる自信」においては、幼保の違いによる主効果が有意であった（$F(1,348)=19.02$, $p<.01$, $\eta_p^2=.05$）。Figure 3に示されるように、幼稚園の母親のほうが保育所の母親よりも強い自信を持っていることが示された。これについては、この因子が授業や学校行事の手伝い、子どもの宿題などを見るといった、比較的時間に余裕があることが求められる項目で構成されていたことによるものと考えられる。保育所の母親は有職者が多いことから、今までの生活にはなかったことを求められるのには抵抗があるのかもしれない。

（４）就学前の親の意識と親性との関連

Table 5は就学前の親の意識と親となることによる成長・発達の各下位尺度間の相関係数を幼稚園・保育所別に示したものである。「Ⅰ自分自身の生活の変化への期待」については、幼稚園において「Ⅲ柔軟さ」「Ⅳ運命･信仰の受容」「Ⅵ生きがい・存在感」との有意な相関が示されたが、保育所においては有意な相関は示されなかった。幼稚園の母親において、これらの親となることによる成長・発達の高さによって期待が高まる可能性がある。また「Ⅱ子どもの様子がわからなくなる不安」については、幼稚園において「Ⅰ社会への関心」「Ⅱ協調と共感」

Table 5 就学前の親の意識と親となることによる成長・発達尺度の各下位尺度間の相関係数

			親となることによる成長・発達					
			Ⅰ社会への関心	Ⅱ協調と共感	Ⅲ柔軟さ	Ⅳ運命･信仰の受容	Ⅴ精神的な強さ	Ⅵ生きがい･存在感
就学前の親の意識	Ⅰ自分自身の生活の変化への期待	幼	.088	.036	.224**	.180**	.110	.153*
		保	.074	.172	-.006	.157	.104	-.025
	Ⅱ子どもの様子がわからなくなる不安	幼	-.158*	-.152*	.111	.040	.108	-.031
		保	-.163	-.261*	.106	-.002	-.048	-.322**
	Ⅲ小学生の親になる自信	幼	.265**	.225**	.208**	.087	.215**	.203**
		保	.066	.307**	.279**	.164	.110	.325**

**:p<.01, *:p<.05

との有意な相関が示されたほか、保育所においはて「Ⅱ協調と共感」「Ⅵ生きがい・存在感」との間で有意な相関が示されたのみであった。「Ⅲ小学生の親になる自信」については、幼稚園において「Ⅳ運命・信仰の受容」以外のすべての因子と有意な相関が示されたほか、保育所においても「Ⅱ協調と共感」「Ⅲ柔軟さ」「Ⅵ生きがい・存在感」との有意な相関が示された。小学生の親になるにあたっての自信は、親となることによる成長・発達の高さとの関連が予想されることから、親となることによる成長・発達の低い母親への援助の必要性について検討の余地が残されているといえる。

4．総合的考察

本研究の目的は、小学校への移行期の親の期待や不安などの意識を幼稚園と保育所によって比較することから、その特徴の違いを描き出すことであった。その際、出生順位と親となることによる成長・発達を考慮すべき変数として検討した。就学前の親の期待や不安などの意識をWildgruberら（2011）による「個人」「関係」「環境」の３つのレベルによって構造的に捉えるよう試みたところ、見出された就学前の親の意識の３因子は、多少の内容のずれはあるもののそれぞれ「Ⅰ自分自身の生活の変化への期待」が「環境」のレベル、「Ⅱ子どもの様子がわからなくなる不安」が「個人」のレベル、「Ⅲ小学生の親になる自信」が「関係」のレベルとして捉えることが可能であると考えられる。そしてこれらは、幼稚園・保育所の違い、出生順位、親となることによる成長・発達の程度によってそれぞれ異なる様相が示された。

保護者支援という視点から考えると、「Ⅰ自分自身の生活の変化への期待」を高めることも必要ではあるが、やはり「Ⅱ子どもの様子がわからなくなる不安」の軽減や「Ⅲ小学生の親になる自信」を高めることが課題となると考えられる。「Ⅱ子どもの様子がわからなくなる不安」は、幼稚園・保育所による特徴的な違いは示されず、出生順位によって、つまり第１子の母親において不安が高いことが示された。同様のことが先行研究（椋田、2013；Nishizakaら、2017など）でも示されており、第１子の母親にとって就学後の様子が想像しにくかったり、情報が得にくかったりすることによって生起するものと考えられる。したがって、就学後の子どもの生活や親のかかわり方についてより多くの情報を提供する、あるいはすでに小学生の子どもを持つ母親との情報共有の場を提供するなどによって､軽減されていく可能性がある。また、「Ⅲ小学生の親になる自信」は幼稚園の母親のほうが保育所の母親よりも得点が高く、また親となることによる成長・発達の高さとも関連することが示された。親となることによる成長・発達は比較的安定した特性であるため、急激に

高めたりすることは難しいと考えられるが、それが低い母親を対象として支援を検討する必要があるかもしれない。「Ⅰ自分自身の生活の変化への期待」は幼稚園の母親でかつ第２子以降のグループにおいて得点の高さが顕著であった。前述のように、幼稚園の母親は子どもが小学生になると保育所の母親よりも自由な時間への期待は高く、その子が末子であるとさらに期待は高まると予想される。幼稚園の母親は子どもの小学校入学に伴う自分自身の生活の変化を予想しているし、ある程度の構えをもって迎える可能性があるが、保育所の母親は小学校入学に際して生活の変化を避け、就労を維持することを求めている可能性がある。それぞれの違いを理解し、就学前・就学後の適切な援助を見出すことが今後の課題といえよう。

本研究は、就学前の保護者の意識から検討を進めてきた。今後就学後の意識の変容にも焦点を当てる必要がある。就学前に抱いていた不安が就学後に解消されたのか、また新たに不安が生じていないかなど、就学前後での変容を分析することにより、保護者援助のさらなる資料を収集することができる。また本研究においては、母親の適応にとって重要な背景要因である家族間のダイナミックスなどの個人要因にまでは踏み込めていない。この点についても今後さらなる調査によって明らかにしていくことが求められているといえる。

付記

本研究の一部は29thEECERA（ヨーロッパ乳幼児教育学会2019年８月ギリシャ）において発表した。本研究は、JSPS科研費　基盤研究（C）課題番号18K02494（研究代表者　西坂小百合）の助成を受けた。

文献

綾野鈴子・西坂小百合・村上康子・権藤桂子 2019a 幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因　共立女子大学家政学部紀要, 65. 93-102.

綾野鈴子・西坂小百合・村上康子・権藤桂子 2019b 幼稚園・保育所から小学校への移行期の母親の適応要因 日本保育学会第72回大会, 東京

柏木恵子　1995　親子関係の研究　柏木恵子・高橋恵子（編著）　発達心理学とフェミニズム　17-52　ミネルヴァ書房　京都

椋田善之　2013　幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程－入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して－　東京大学大学院教育学研究科紀要,　53. 233-245

文部科学省 2015　国立教育政策研究所教育課程研究センター．スタートカリキュラムスタートブックhttps://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf,（参照2020-10-1）

Nishizaka, S., Gondo, K., Murakami, Y., & Ayano, S. 2017 The adaptation of parents during their children's school transition from kindergarten to elementary school in Japan. Poster presented to the 27th EECERA annual Conference in Bologna, Italy.

OECD. 2017　Starting Strong V: Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education. OECD Publishing, Paris.

富山尚子　2014　小学校への適応に向けて－小学校１年生の保護者の意識－　東京成徳大学子ども学部紀要,　3. 9-17

富山尚子　2015　小学校と保護者の連携　－入学直後の保護者の意識－　東京成徳大学子ども学部紀要,　4. 1-8

Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B. 2011 Parents in their transition towards school. An empirical study in Germany. Paper presented to the 21st EECERA annual Conference in Geneva, Switzerland.

謝辞

本研究の実施にあたってご協力いただいた幼稚園及び保育所と保護者の方々に厚く御礼を申し上げます。